国語辞書にない言葉：私の新語採録ノートから

高野正夫*

東京大学医学図書館

私がここでいう、「辞書にない」という意味は、いくつかの内容を含んでいる。一つは、英和辞典や和英辞典に、適訳語がない、という意味であり、二つめは、従来の慣用的な使用法に、新たな解釈を盛りこんだために、字引の説明が欠落している場合であり、三つめが、文字どおりの新造語である。

私が関係している、機械翻訳文献の中には、Farmer や, Forester が頻出するが、きわめてありふれたこれらの言葉には、いつも奇妙な感じをもっている。英語で農民をあらわすこの訳語は、「農夫」であり、ほかに、Peasant がある。この訳語は「百姓」である。しかし、現実問題として、日常的に「農夫」などという言い方をするであろうか？ 私たちの感覚からすれば、田畑で働いている人は、「農夫」でも「百姓」でもないのである。「詩人と農夫」など、「農夫」には、何となく気取った西欧文化の匂いが付きまとうし、「百姓」はあまりにも侮蔑的である。同じく、英和辞典の説明によれば、Forester の訳語は「林学者」「林務官」「林政官」である。山林で働いている人は、このどれにも当てはまらないのである。最近、直木賞を受賞した、伊集院静氏の小説「受け月」の題名をめぐる、朝日新聞紙上で、語源論争があった。この言葉は、どんな大部な辞書にも載っていないからである。これなどは、文字どおり、辞書にない言葉である。新語の中には、従来の用語を

再構成したり、新たな意味付けをしたものなどもある。以下は私の興味を引いた二つの例である。

「からだ産業」

以前、私の勤務していた図書館に、放送大学の加藤秀俊教授を長とする報告書、「日本におけるからだ産業の将来」(シー・ディー・アイ発行)が送られてきた。初めてこのレポートを見たとき、一瞬我が眼を疑った。「からだ産業」=「性風俗産業」という連想をしたからである。週刊誌ならともかく、高名な学者が集まって「性風俗」産業の将来について研究・予測するというのも、私の理解を超えるものであった。しかし序文を読むにいたって、私は、自らのげすな想像力を恥じたのである。「からだ産業」は以下のように定義されている。「われわれの生を、より健康的に、より美しく、より快適にするような「からだ」をめぐる人間の営為を対象とする産業」。この産業は、GNP比で、5.7%の規模をもつという。「からだ」の消費に、主として、物質文化的側面から光を当てたこの研究にとって、従来のタテ割りの産業区分はなじまないし、包括しきれなかったと思われる。

「花眼」

この美しい語に初めて接したのは、昭和61年6月4日の、「朝日新聞」に載った「花眼開いて美しさ見える」という、島田玲子さんの「読者欄」に載った投稿記事である。

島田さんは、森澄雄氏の句集「花眼」に触れ、

* Masao TAKANO : 〒113 文京区本郷7-3-1.

この「花眼」が、「老眼」のことであり、ようやく花が美しく見え出す充実の年齢である、と記している。

島田さんは、初めてこの言葉に出会った時、軽いショックを受けた、と感動をもって記し、結びに、自らの句を載せている。

花眼にて／愛ずる牡丹の／陰影（かげ）の濃き
私もこの語の美しい響きに感動した。「老眼」は、妙に寂しさが漂う。肉体の衰えだけが目立つ。自らも老眼鏡を必要とする年齢に到った私は、以来ずっとこの言葉を心に留めていた。「古い」の象徴としての、「老眼」を、「花眼」に置き換えることによって、突然、全く別な世界が現出する。この日を境に、未だ、花の真の美しさがわかる充

実の域に達しない私は、花の美しさを、貪欲に見てやろうと思うようになったのである。

後日、この言葉の真意をしりたくて、俳人森澄雄氏に手紙をだした。すぐに、懇切なお返事をいただいた。氏によれば、この語の一つの解釈は、杜甫晩年の作にある、「老年花似霧中看」（老年ノ花ハ霧中ニ看ルニ似タリ）であるという。手紙の中で、森氏は、句集「花眼」の意味に言及され、次のように書いておられる。『「花眼」は、年齢の豊賦と孤独の中に、自然とうつくしさとともに、人生の妖しい彩りの美しさが見えてくる眼として、生のよろしさを見ようとした。』（原文のまま）この美しくポエチックな言葉は是非、日本語のヴォキャブラリーの中に加えて欲しいものである。